

【ポスター発表】

主題：禅仏教の死生観と支援

○ 澤野純一 花園大学 (007647)

安田三江子 花園大学 (3450)

キーワード：仏教福祉(禅仏教)、死生観、支援

1. 研究目的

福祉サービスの利用者では高齢者をはじめ死が身近であるひとも少なくない。支援者にとり死生観は重要である。死生観は死に身近な人への支援に止まらず日常の支援にも大きな影響を及ぼす。支援者の死生観は生への支援に転写するからである。現代でも宗教は人びとの死に関して大きな影響を及ぼしており、宗教における死生観の研究は行動科学の観点からも重要である。日本では無宗教と称するひとは多いが、埋葬にあたり僧侶による読経が伴うことが多く、仏教は身近である。仏教には寛容性があり人びとが宗教にこだわらなくてよい面ももつ。それゆえ、我が国において仏教の死生観と支援の関わりについて考察をしていくことは意義が深い。さらに、吉田久一の人生最後の問いは「欧米系の自己決定の原則と東洋のもっとも重大な共存、共生についての統合の方法への探求」（永岡 正己（2021:44）「吉田久一の生涯と仕事」『吉田久一とその時代』大谷 栄一他編法蔵館）であるが、本研究によるアプローチからこの問いに関して得られる示唆もあるだろう。

2. 研究の視点および方法

まず死生観がひとの行動に及ぼす影響は大きい。このことを高橋伸夫（ミクロ組織論）の「見通し指数」の考え方から明らかにする。次に文献により（辻光文（1999）『いのちのかけら—生きているだけではいけませんか』クイックス、辻光文「理事無碍」はなぞのふくし出版年不詳）禅仏教における死生観について探求をし、死生観が生き方や福祉の支援に転写されていく状況について考察する。仏教福祉学では浄土系仏教の視座からの研究が多いが、禅仏教に惹かれる人も多く、禅仏教の視座からの研究も重要である。

3. 倫理的配慮 公刊書籍からの文献研究である。剽窃・捏造・改竄、二重投稿はなく利益相反は生じていない。

4. 研究結果

（1）死生観の及ぼす影響について—見通し指数—

マックス・ヴェーバーは20世紀の初頭に『プロテスタンティズムと資本主義の精神』（1904-1905）で宗教からもたらされる死生観がいかに人びとの精神と行動を規定しているかを示した。一方、現代のミクロ組織論の研究者である高橋伸夫は企業へのアンケート調査から「見通し指数」を作成した。この指数によると、未来への展望は職務満足に正の相関を退職願望に負の相関を示す。さらに、自己決定感と満足度は生の相関を示すが、その相関は疑似相関であり未来への展望が背後にあり相関しているとする（高橋伸夫（2020）「見通し指数に関する因果関係とコーホート効果」日本組織学会『組織科学』2020年19巻

5号 p. 139-157)。死生観とはまさしく死後の見通し、死後という未来への展望である。多くの宗教にはさまざまな死生観がありひとを支え生き方に大きな影響を及ぼすといえる。

(2) 禅仏教徒の死生観と支援について

1. 個から出発する「自他一如」「自他不二」

「人間は人間によって育てられるのであり、すべては深い個と個の感情の共有を土台とするものでなければならぬ。即ち言葉を変えて一言でいうならば「共に生きる」ということであり、ここにはじめて人間の救いがあり、福祉がはじまる」(辻「理事無碍」はなぞのふくし出版年不詳)と辻は述べる。ここでは、まず、一人一人の個の存在が前提とされている。しかし、「一方、『自分』とか『私』とか本当の真の意味の「自己のいのち」とはいえまい。真実の世界は『自他一如』『自他不二』の中にある。」(辻 1999: 246)とされ、個は単独では存在しておらず「共に生きる」ということが導き出される。

2. 死生観と今の生き方

辻は「鳩の友情」(友達が住む山に火事に起こり鳩はおろおろし羽を濡らしてその山に滴を運ぶが力がつきやがて死んでしまう)という幼少期に印象に残ったという仏教童話を引用しつつ「なすべきことをなしてそれで終りということではいいのではないか」と述べる(辻 1999: 73)。つまり、死はさけようもなくひとは死の前に無力いう死生観である。そして辻は「死んでいくことが一番不幸であるという生き方は間違っている。死んでいくときがやはり幸せであるという生き方」を問い、「ただ今、今、今を精一杯やる。それだけ、それ以外に何も無い」という結論にする(辻 1999: 73)。「自他不二」「生死一如」という禅仏教の思想は、人と人のあり方とともに生と死の関係性も意味する。今を精一杯生きる幸せが生死を越えた幸せになる。ひととひと、生と死はそれぞれ別のものではなく一如である。ゆえに、前述の鳩も幸せであるとなるだろう。

3. 支援について

辻は、子どもや障害者と関る空間を共に生きる場として捉えた(辻 1999: 161-204)。ここに禅仏教の他者との共存・共生、生と死の共生の思想がある。そして、死後、つまり未来に脅かされることなく今を懸命に共に生きる実践になる。辻は教護院(現児童自立支援施設)の職員として子ども達に「将来のために」という未来を手段とした支援に節度もち「先のことは先のこととして、今ここで一緒に精一杯生きる」ことを目指した(辻 1999: 155)。逆説的ではあるが、これは禅仏教の将来を見据えた思想でもあるといえよう。

5. 考察

死生観及びそれに関わる宗教が人々に大きな影響をもたらすことは見通し指数からも明らかである。禅仏教では、個の存在を前提としつつ、個と個の生はつながり、生と死も超えるという思想「自他不二」「生死一如」をもつ。ここから今を精一杯生きる重要性が認識され支援にも現れる。最後に吉田の問いにもどる。個から始まる禅仏教の思想には東洋の共存、共生の思想の中に、西洋的な自己決定があると示しているのではないだろうか。